

手が納得できる形で説いている。このことが未  
だに多くの初任者研修や教育研修会において教  
材として取り上げられている所以と思われる。

桑原真人・川上 淳著

『北海道の歴史がわかる本』(榊垣西社、2008年3月発行、1500円+税)

●—————石田 武彦

「中学生の副読本的な役割を持ちながら、大人の知的好奇心を刺激するものとしたい」と本書の「あとがき」に述べられているが、本書は、北海道史の新しい研究成果を取り入れつつも、何よりも読みやすいこと、一般の読者に分かりやすいことを強く意識して執筆された。そのために、独自の工夫が施されていることは後述するとおりである。

本書は、大掴みにいって「あけぼの編」と「躍動編」の二部に分かれている。各編は3つのパートとあわせて26のトピックに分かれているから、2編・6パート・52トピックから構成されている。北海道の歴史を教科書のようにすべて網羅しているわけではないが、全体を通して読むと北海道の歴史が分かるようになっていく。

川上淳氏が担当した「あけぼの編」は、「北海道特有の時代区分はどうして生まれたのか？」(トピック01)が、先ず以てイントロダクションとなり、[パート1]「黎明期～アイヌ・和人の相克(原始～中世)」は、「2～3万年前に現れた北海道最初の人類」(トピック02)以下、あわせて9つのトピックが挙げられている。[パート2]「松前藩の成立～クナシリ・メナシアイヌの戦い(近世I)」は、「ラッコ毛皮献上が生んだ松前藩成立への道程」(トピック11)以下、7つのトピックが、[パート3]「ロシアとの接触～松前藩・蝦夷地の終焉(近世II)」は、「鎖国状態だった江戸時代、蝦夷地も鎖国していた？」(トピック18)以下、9つのトピックが挙げられている。

桑原真人氏が担当した「躍動編」は、「北海道は無人地だった？ 蝦夷地から北海道への歩

み」(トピック27)がイントロダクションとなり、[パート4]「開拓使の設置～三県時代の北海道(近代I)」は、「箱館に設置された司法機関とは異なる裁判所」(トピック28)以下、7つのトピックが挙げられている。[パート5]「北海道庁の設置～許可移民制度の始まり(近代II)」は、「海派か、陸派か——開拓方針を巡るせめぎ合い」(トピック35)以下、12のトピックが、[パート6]「戦時下の北海道～未来への視座(現代)」は、「韃靼海峡を埋め立てる!? 2代目宇三郎の北方開発論」(トピック47)以下、6つのトピックが挙げられている。

本書を通読してまず目に付くのは、各トピックのタイトルがかなり長いことである。本書が対象として想定している読者の知的好奇心を刺激すべく、あえてこうしたものであり、本書独自の工夫のひとつである。

また、各トピックの始めには必ず「時代MEMO」が付せられているが、これは、北海道の歴史が近代以降の「開拓の歴史」に矮小化されるほど短くて新しいわけではなく、日本史や世界史の中に正当に位置付けられなければならない、という著者の視点を具体化したものであろう。

さらに、各トピックごとに参考文献が挙げられているが、これにより新しい研究成果が取り入れられていることが分かるし、さらに北海道の歴史を窮めようとする読者にとって役に立つことであろう。

北海道に生まれ育ちながら、北海道の歴史に疎かった紹介者にとって、本書は北海道史の入門書として大いに啓発されるところがあった

し、より深く追求した、という思いを新たにし た。

リッカルド・カショーリ著、アントニオ・ガスパリ著、草皆伸子訳  
『環境活動家のウソ八百』(洋泉社、2008年8月発行、760円+税)

—————石橋 佳法

近年、環境問題への関心の高まりからさまざまな場所で“エコ”という言葉が耳にする。しかし、この“エコ”という言葉自体が一人歩きをしてしまっていないだろうか。

本来、環境問題等で使用される“エコ=エコロジー”という言葉は「生態学」または「生態的環境」を指し、多くの人が思い描く“環境にやさしい”という意味は持ち合わせていない。また、現在多くの企業が行っている“エコ事業”と呼ばれるものの中にも、本当に環境にやさしいものであるのかどうか疑問符がつくものもある。企業側のいう“エコ”は環境にやさしい=地球温暖化問題にどう取り組んでいるのかという意味合いが強く、“CO<sub>2</sub>の排出量を極力抑え、経済的なもの”という意味で使用されている。そして、消費者側も、“エコ”という言葉で“環境にやさしい=温暖化対策”と理解しているようだ。

このような背景には、現在の環境問題の多くが「地球温暖化問題」と関連付けられて報道されているという点にある。地球温暖化問題はさまざまな環境問題の一因ではあるが、それぞれの問題の主因ではない。それぞれの問題の主因を解決していくことが重要なのではないだろうか。

本書は、現在の環境保護運動の根底には、選民思想や途上国の発展抑制論、人口抑制論といった考え方があり、これらの思想に基づいて国際的な環境保護活動が展開されているとしている。また、一部の過激な環境保護活動家や団体による広報活動が現在の環境問題を歪曲させているとして、彼らが訴える地球の現状についての検証も行っている。そして、環境問題を解決

するためには、人間の尊厳を重視するだけでなく、人間を始め地球上に生きる全ての生物の幸福の実現を目標とした方法論を再構築すべきとして、本書がそのためのきっかけとなることを目的としているという。

本書は、以下のような4部構成となっている。

第1部「環境というイデオロギーの名のもとに行われる数々の欺瞞」では、ダーウィンの進化論から派生した選民思想(本書では「優生学」)が急進的なフェミニズムや産児制限(バース・コントロール)運動、環境保護運動とどのように結びついていったのかという思想史的な検証を行っている。

第2部「環境問題の常識に反証する」では、環境問題を考えるうえでよく耳にする環境神話(人口過剰は実際に起こっているのか、持続可能な開発は可能か、予防原則の罨、地球温暖化の影響はあるのか、森林破壊は本当に進んでいるのか、種の消滅はおきているのか、遺伝子組み換え食品は危険なのか、大気汚染は悪化しているのか)についての検証を行っている。

第3部「正しいエコロジーとは何か」では、環境学研究者と環境活動家の違いについてとりあげている。環境学研究者は個々の問題において、さまざまな分野の知識や技術を総動員して解決策を見出すのに対し、環境活動家は問題の解決のための犯人捜しに奔走し、問題の本質を見失っていると指摘する。このような環境活動家の思想の根底には“科学不信”と“自然崇拜”があり、このような思想をさらに推し進めた過激な環境保護団体の活動にはモラルも人間性もなく、環境問題を解決するためには、従来のような方法論ではなく、新たな方法論を再構築す